

「あ、そうか」

Somkiat Konchan

「あ、そうか」は日本人にとっては、ごく当たり前の話し言葉でしょう。何か
がわかった時「あ、そうか」とさげんだり、つぶやいたり、頭の中で言ったりし
ます。

しかし、ドンデーン村の人々や、アシスタントが受けた感じからすると、「あ、
そうか」は、最初に覚え、そして誰も教えてくれなくても意味が分かった言葉な
のです。

実際そういった光景は昔のことで、色褪せてしまったみたいです。それぞれに、
仕事が増え、より興味のある研究が新しくできたりして頭の中の情報が多くなっ
たからでしょう。でもそういうのは、その後いろんな経験をしてきた人のことで、
あまり後の経験のない人、つまりタイの村の人にとっては、それはまだ忘れ難い
記憶なのです。

筆者が日本に来られると知った時にまず考えたのは、ドンデーン、そしてイサ
ーンの田舎のことでした。次に、日本に行って一体全体何をするのか、何ができ
るのか、という疑問が頭をもたげてきました。なぜなら、今まで住んでいた所、
見てきた所が何のことを考えてもすっかり見通せるのとは違って、日本のことは
心に思い描くことができなかつたからです。

飛行機は、沖縄上空を通過して、日本に入りました。そして、大阪に向かって高
度を下げていった時、市街地の電線が驚くほどたくさんあるのが目に入りました。
その時、日本人は一体どのようにして暮らしているのか、なぜこんなに電線があ
るのかと思いました。

とにかく、ここでの生活を始めることができました。実際、チャンサンポー（
イサーン語のあ、そうか）と心の中でつぶやくことがよくあります。ご飯を食べ
る時に、どんな種類のご飯を食べるか、そしてどのように食べるか、どう注文す
るか、また買物に行く時であれ、道を歩く時であれ、すべてのことが疑問の連続
で、起きてから寝るまで驚きと面白さでいっぱいです。

私が日本にきて初めて「あ、そうか」と言えたことは、ドンデーンの日本人研
究者が、普通のことであるにもかかわらず、何かにつけて質問し、どれだけ聞い

でも気がすまないのはなぜか、ということでした。あの時は私には全くわからないことでした。

われわれは違う所に住んで、異なる文化に属し、異なる生活をし、異なる言語に触れて初めて、「あ、そうか」できるのです。

だけど、学問をすることには気の重いことがまだ増えそうです。われわれが過去に経験のない社会で、人の暮らし、生活を研究することは、そんなにやさしいことではありません。それを外国人の研究者が知り得ることは本当にすばらしいことであり、外国に研究に行くとドンデンチームのようにすべてを理解することができるのです。

筆者にとっては、まだまだ道程は遠いので、まず理解し合えるための言葉を使えることを期待したいと思います。いつになるかわかりませんが、もしはっきりとわかったら、まず最初に、[REDACTED]に言いに行って、一緒に「あ、そうか」することでしょう。

(須羽新二訳、林行夫校閲)

なお、お暇な方は下記に連絡してください。

(自宅) [REDACTED]
[REDACTED]

(大学) [REDACTED]